古典語の係り結びと情報構造

近藤泰弘（青山学院大学）

YHKONDO@CL.AOYAMA.AC.JP

シンポジウム「係り結びと格の通方言的・通時的研究」

2022年9月19日・20日オンライン会場

本日の発表のあらすじ

１　古典語の情報構造に係わる従来の研究

　　副助詞の体系と係助詞の体系の対比

２　係助詞の出現位置

３　複文における係り結び（特に条件節）

４　まとめ（係助詞と焦点）

古典語の情報構造に係わる従来の議論

係助詞の分類

範囲は、山田孝雄の規定による（ただし、禁止の「な」は除く。「し」を係助詞に入れる立場もあるが（大野晋等）今回は除いて考える）。

１　は・も　（第１種係助詞・提題に係わる）

２　ぞ・なむ・こそ（第2種係助詞）

３　や・か（第２種係助詞のうち疑問文に主に用いられるもの）

本日の発表では、主に2と3を取り扱う。

用いたコーパス

国立国語研究所の歴史コーパスを用いる。現時点での最新バージョンの平安時代語部分を主に用いるが、統計資料としては、八代集のうち、古今集のみが入っていたバージョンを用いている。

また、主に中納言を用いるが、統計資料としては、末尾にあげた研究プロジェクトによるSQLサーバーのコーパスの原テキストを用いた部分もある。

したがって、依拠した古典語の本文（底本）も上記コーパスのものである。八代集が版本であることなど、底本のテキストクリティーク的には若干の問題があるが、コーパスによる検索・用例調査の便宜から、今回はこれによった。

古典語の係助詞の情報構造の研究史

本居宣長 『てにをは紐鏡』『詞玉緒』 「ぞのや何はも徒こそ」を示した係り結びの研究であるが、「何」（疑問詞）や「徒」（ハダカ格）を含む総合的研究になっている。特に、『詞玉緒』は、扱った文型の多彩さによって、現在に至るも追随を許さない。

山田孝雄『日本文法論』(1908） 係助詞の範囲を確定。その機能を「陳述」とした。

阪倉篤義『文章と表現』 (1975）係助詞の「卓立の強調」の性格、および、「なむ」の持つ、「聞き手への確かめ」の働きを提案。

大野晋『係り結びの研究』（1993）係助詞を二種類にわけ、旧情報を示す「は・こそ・なむ・や」と、新情報を示す「も・ぞ・か」の区別を示した。

係助詞のフォーカスと副助詞のスコープ

近い関係にある係助詞と副助詞との対比による研究方法が有効

（主語に承接）

花ぞ散りける　　花のみ散る

（述語の中）　　（基本的には位置が重要）

かへりぞする　　かへりのみす

(現代語副助詞）　本だけを買った。 ≠　本を買っただけだ。

本も買わずに、帰った。 ＝ 本を買いもせずに、帰った。

古典語の副助詞の種類（1）

●第１種副助詞　語に後接する

ばかり・まで

●第２種副助詞　成分に連接する

のみ・だに・さへ

第１種＋格助詞　　ばかりを

格助詞・形容詞連用形＋第２種　　をだに

第1種＋第２種　　ばかりだに

（近藤1995・小柳智一1998の分類名）　cf.　係助詞は第２種の次に位置する

古典語の副助詞の種類（2）

（意味の区別）

限定(restrictive)副助詞　　（近藤2003による）

ばかり・のみ

添加(additive)副助詞

まで・さへ・だに・も

Cf. restrictive focusing modifiers: alone, only, just, mainly, etc.

additive focusing modifiers: again, also, either, even, neither etc.

(Huddleston & Pullum 2002)　反対の関係にある　not only but also

・・・のみならず・・まで

英語の副詞のスコープ

He loves [only his work]. (NP)

It's the sort of thing that could happen [only in America]. (PP)

The problem is [only temporary]. (AdjP)

He agreed [only somewhat reluctantly] to help us. (AdvP)

He apparently [only works two days a week]. (VP)

Only disturb me if there's a genuine emergency. (Imperative clause)

(They cannot, however, modify any other kind of main clause than an imperative.)

（Huddleston & Pullum 2002）

副助詞のスコープ再論

<u>「限定」のスコープと、「焦点」</u>

〇私は昨日は本を3冊買っただけだ。（VP限定）

〇私は昨日は本を3冊買っただけではなく、ノートまで手に入れた。（VP対比）

（英語の限定副詞と同様に、副助詞には、「文限定」というものはない。）

「焦点」の場合は、「文焦点」もあり得る。

〇（ほら、外、見て。） 雪が降ってる！ （文焦点）

〇（「雨はどう？」）はい、雨、止みました。（述語焦点）

この研究の目標

係助詞の持つ焦点（フォーカス）のありかたを、原因・理由という部分との関係から解明する。

係助詞の出現位置

係助詞の位置（単文）

１ 名詞・疑問詞の前後　　山こそ・いつか・や誰　　（小田勝2015等参照）

２　格助詞の後　をなむ

３　副助詞の後　ばかりぞ

４　係助詞の後　いつぞや

５　副詞・形容詞連用形の後　高くなむ

６　接続助詞の後　　あればこそ

７　用言等の中間　　走りぞする・美しくぞある・散らずぞある・虫にぞある

副詞と係助詞との承接

〇我がために来る秋にしもあらなくに虫の音聞けばまづぞかなしき（古今・秋上・読人不知）

〇ふる雪はかつぞ消ぬらし足曳の山の滝つせ音まさるらし（古今・冬・読人不知）

〇あふからもものはなをこそ悲しけれわかれんことをかねて思へば（古今・物名・深養父）

〇やうやうなむ見たまへ知る（源氏・帚木）

〇げにこそいとかしこけれ（源氏・若紫）

係助詞の位置（複文）

副詞節（これらのそれぞれの後）

A類　て（一部）・とて・にて・ながら・つつ

B類　て（一部）・未然形ば・已然形ば・ども・とも

C類　ものを・に

名詞節

残りなく散るぞめでたき、桜花（古今・春下）

関係節

女のかく若きほどに、かくてあるなむ、いといとほしき（大和物語）

複文における係り結び

副詞節と係助詞

副詞節と係助詞の承接

A類	て	なむ・こそ・ぞ・や・か
	ながら	こそ・ぞ・や
	つつ	なむ・ぞ
	とて	なむ・こそ・や

（コーパスからコンピュータで連接表を作成した）

副詞節と係助詞

副詞節と係助詞との承接（2）

B類	て	なむ・こそ・ぞ
	にて	なむ・こそ・ぞ
	未然形ば	なむ・こそ・ぞ・か
	已然形ば	なむ・こそ・ぞ・や・か
	ども・とも	（例なし）
C類	に	なむ・ぞ

条件節と係助詞

1　逆接「とも」「ども」には係助詞は接続しない

これは副助詞も同じ。例外としては1例。

〇おぼつかなさもことわりに、さりとも、など慰めたまふを（源氏・総角）

ほぼ引用的な話法であり、通常の副助詞の接続とは違う。

（ちなみに、一般に副助詞は「て」「で」「つつ」には接続するが、他の接続助詞には付かない。例外は、「など」。上の場合と同じ。）

〇思ひかへしてのみあり（蜻蛉日記）

〇ながめつつのみ過ぐす心を（和泉式部日記）

〇見聞きたまひしかばなど思ふに（蜻蛉日記）

条件節（仮定）と係助詞

順接の場合、未然形接続（仮定）と已然形接続（原因・理由）では大きく違う。

(未然形＋ば）（仮定）

（疑問詞が含まれる疑問文）

〇いかならむ巌の中に住まばかは、世の憂きことの聞こえこざらむ（古今・雑下）

（疑問詞がない疑問文）

〇紅にしほれし袖も朽ちはてぬあらばや人に色もみすべき（千載・恋三）

条件節（仮定）と係助詞

（未然形＋ば）（仮定）

（肯定文）そのほとんどの例が「こそ」に限られる。「ぞ」は基本的にない。「こそ」の意味を解明するための重要な手がかり。

〇この国に生まれてはべらばこそ、使ひたまはめ（竹取）

〇仏をも念じたまはばこそあらめ（源氏・総角）

「なむ」も例が少ない。

〇もてなせたまはばなむ、本意なる心地すべき（源氏・澪標）

条件節（原因）と係助詞

（已然形＋ば）（原因・理由）

（疑問詞が含まれる疑問文）

○［いかにふけばか］、わびしかるらん（古今・恋五・読人不知）

（疑問詞がない疑問文）

○［おもひつつ寝ればや］人の見えつらむ（伊勢物語）

疑問のスコープの中に焦点が含まれている。

条件節（原因）と係助詞

（已然形＋ば）（原因・理由）

（肯定文）そのほとんどが「こそ」である。「ぞ」の例はほぼ文末に限られる。「なむ」の例も少ない。現代語で「だからこそ」などと言うのはその名残り。

［わざとおぼせばこそ］、忍びてゐておはしたらめ（和泉式部日記）

親なればぞかしとあはれなり（枕草子）

喩えぬべければなむ」と申したまふ（源氏・須磨）

［思ひたまへはべればなむ］いとほしく思ひたまへはべる（源氏・東屋）

連体形「なり」の持つ特殊なスコープ

古典語の原因推量肯定文のスコープ形成には、連体形接続の「なり」が関与する。

（高山善行2002の記述による）

［詳しく言ひ続けんことのことごとしきさまなれば］、漏らしてけるなめり（源氏・賢木）

（詳しく語り続けるのは大げさなことになるので、語り漏らしてしまったのだろう。）「現代語の「のだ」と似た現象。

？？彼がいるから、北海道大学に行きますか。

［彼がいるから］、北海道大学にいくのですか。

（Kuno1982、田窪2010による）「から」節を、疑問の焦点にするためには、「の」のスコープ内に入らなくてはならない。（デフォルトでは述語焦点となる）

まとめ（係助詞と焦点）

「ぞ」と「こそ」の差異

条件節に「こそ」が専ら用いられる。わずかに「なむ」も使われる

＝ 「こそ」「なむ」が疑問詞を受けないことと並行する（旧情報）

「ぞ」が使われない。

＝ 「ぞ」が疑問詞を受けることと並行する （新情報）

条件をうける「なり」

〇つよからぬは女の歌なればなるべし（古今・仮名序）

〇吹く風の色のちくさに見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり（古今・秋下）

この文型は「已然形＋ば」（原因理由）にしか存在しない。

形としては、分裂文の文型である。理由は「吹く風の色のちくさに見えつる」は、主辞内在型の関係節ではないからである（「見えつる」が状態性アスペクトではない。石垣法則による）。これをもとに戻すと、先の高山の指摘の文型となる。焦点を後方に移動して、新情報と旧情報を逆転させて、分裂文としている。

〇女の歌なれば、つよからぬなるべし。

〇秋の木の葉の散れば、吹く風の色のちくさに見えつるなりけり。

条件を受ける「なり」の変種

「ばなり」の文型の疑問文

〇世の人の言へばにやあらむ（和泉式部日記）

（「や」が条件をうけている点で、「こそ」「なむ」と共通する。ここからも条件節は「旧情報」であることがわかる）

〇さればにや。（大鏡）

大変に省略されているが、基本は同じ。

係り結びの「結び」部分の機能

１　係助詞の存在によって、情報の焦点が述語以外の部分にあることを示す。

２　係助詞の種類によって、新情報・旧情報を区別する機能を持つ。

３　特殊な文末形式によって、デフォルト焦点スコープを拡大する機能を想定する。

今後の課題としては、係助詞と格助詞の相互関係から、格表示と情報構造との相互関係の記述を行っていく必要がある。

（竹内史郎・下地理則（2019）等参照）

参考文献

山田孝雄（1908）日本文法論（宝文館）

阪倉篤義（1975）文章と表現（角川書店）

大野晋（1993）係り結びの研究（岩波書店）

近藤泰弘（1995）「中古語の副助詞の階層性について」（益岡隆志他編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版）

小柳智一（1998）「中古の「ノミ」について―存在単質性の副助詞―」（『國學院雑誌』99―7）

小田勝（2015）実例詳解古典文法総覧（和泉書院）

高山善行（2002）日本語モダリティの史的研究（ひつじ書房）

田窪行則（2010）日本語の構造　推論と知識管理（くろしお出版）

竹内史郎・下地理則（2019）日本語の格表示と分裂自動詞性（くろしお出版）

Huddleston & Pllum (2002) The Cambridge Grammar of the English Language, Cambridge U.P.